六、ハナの因果

後ろ手に縛られた私とソヒョンは、ハナと宋紀に引きずられ村の広場まで連行された。捕虜になった五十人ほどのコサック兵が、武装解除され、後頭部に両手を当てて坐らされていた。その周囲を銃を構えた馬賊たちが囲んでいる。

私とソヒョンは、コサック兵捕虜からやや離れたところに縛られているドイツ観戦武官たちと一緒に坐らされた。

「お前たちのなかに……」

ハナは、コサック兵たちに向かって叫んだ。

「支那人虐殺をやった者はいるか？　いたら、立て」

コサック兵たちは、互いに顔を見合わせ、無言で俯(うつむ)いた。

ハナは続けて叫んだ。

「では、このなかに支那人を殺した者がいれば、そいつを指させ。誰もささなければ、全員ただちに銃殺に処する！」

コサック兵たちは愕然として、強張(こわば)った面差しでハナを凝視した。ハナは、背にかけた小銃を引き抜き、小脇にかかえて安全装置を外した。

「Он убили китайца(アニー ウービリ キタイーツァ)（こいつが中国人を殺しました）！」

一人のコサック兵が、仲間を指さした。さされたコサック兵が激昂して何か言い返す。たちまちコサック兵たちは、互いを糾弾し、罵(ののし)りあった。

ハナは、じっとコサック兵たちの騒ぎを見つめていたが、やがて宋紀に命じ、指さされる事の多い十人を選んで引きずり出した。十人は泣き叫んで哀願したが、たちまち縛り上げられ、地面に転がった。そのうち一人が、ハナの合図で、広場に生(は)えている木の幹に縛り付けられた。

さらにハナが合図すると、馬賊たちが、支那服を着た四人の女たちを連れてきた。ハナが、女たちに言った。

「照我的样子做(チァオウオドウーイァンヅウヅウオ)（私のやるとおりになさい）」

そう言ってハナは、幹に縛られたコサック兵に歩み寄り、いきなりその股間を蹴り上げた。コサック兵は呻(うめ)き、それを見ていた兵たちは息を呑んだ。

「来(ライ)（さあ）！」

ハナは、女たちを促した。一人の女が意を決したように、悶絶するコサック兵に近寄り、睾丸に膝を打ち込んだ。絶叫して泣き叫ぶコサック兵の股間を、女たちは次々と蹴った。四人が蹴り終わった時、コサック兵は意識を失い、ぐったりとなっていた。

「次（チ）！」
ハナの命令で、二人目の兵が幹に縛られた。恐怖に震えるコサック兵は、次々と女たちに蹴られ、最後に股間が赤く染まった。睾丸が潰れ、陰嚢（いんのう）が裂け、出血したのだろう。
蹴っている女たちは、ブラゴベシチェンスクで家族を殺され、命からがら逃げてきたということだった。
十人の「去勢」が終わると、ハナは宋紀に、コサック兵たちをアムール川まで連行し、船に乗せて返すよう命じた。去勢された兵たちも運び去られた。
コサック中隊長と、ドイツ観戦武官、そして私とソヒョンは残るよう命じられた。私たちは、村でいちばん大きな家に連行され、尋問を受けた。
「尋問」はコサック中隊長から始まった。彼は、両手を縛られて天上から吊された。ハナは自ら尋問を行った。ブラゴベシチェンスクにあるロシア軍の人数や配備、武器、作戦意図などである。答えを拒否すると、たちまち股間に蹴りが飛んできた。見ていたドイツ観戦武官たちが嘔吐しそうになるほど、残酷な拷問だった。「尋問」が終わった時、中隊長の股間は赤く染まっていた。彼は、別室に運び去られた。
ハナの尋問ぶりに怯えていたドイツ観戦武官たちは、彼女の質問にすべて答えた。彼らは傷つけられることなく、別室に連れていかれた。
部屋には、ハナとソヒョン、私だけが残された。
「太太（タイタイ）（女主人）！」
ソヒョンは、眼に涙を浮かべてハナと抱擁をかわした。ハナはいとおしげにソヒョンを抱きしめたまま、私に顔を向け、
「なぜ、帰ってきたの？」
と問うた。責めているのではなく、むしろ嬉しそうだった。自分でも思いかげないくらい、素直に言葉が口をついて出た。
「ハナに会いたかったからだ」
ソヒョンが、ひゅーと口笛を鳴らし、ハナは、満面の笑みを浮かべて私に歩み寄り、腹部を軽く拳（こぶし）で叩いて言った。
「ほんとうに、お前は、日本の男らしくない」
彼女にとって最上の褒（ほ）め言葉だった。さらに手を伸ばして私の頬に触れ、こう言った。
「お前は、あたしにとってただ一人、また会いたくなる日本の男だよ」
外から、歌声と手拍子が聞こえてきた。広場で、戦い終わった馬賊たちの酒盛りが始まったようだ。
「積もる話は、明日、聞く」
ハナは、そう言い残して、部下たちと勝った喜びを分かち合いに、外へ出ていった。

翌朝。
夜明けとともに、ハナは少数の見張りを残して馬賊たちを出発させ、私とソヒョン、宋

紀の三人と、今後の協議を始めた。私は、ブラゴベシチェンスクで得た情報をできる限り喋った。

「やはり、あいつらの目標は、瑷渾(あいぐん)か」

ハナは、額に手をあてて考え込んだ。

瑷渾(あいぐん)は、清国軍の司令部が置かれているというだけでなく、砂金の密輸で儲けた商人が多数いる。コサック軍団は、もともとロシア人に征服された少数民族だ。しばしば反乱を起こしてきたコサックを、ロシア帝国は戦争に使役し、攻めた都市での略奪行為を許すことで、宥(なだ)めてきた。

裕福な瑷渾(あいぐん)の攻撃は、ロシアにとってはコサックを統治する上からも、意味があることなのだ。

「次はもっと大勢で攻めてくるに違いない」

ハナは呟いた。私は頷いた。ここに来る前から、ブラゴベシチェンスクには、他からの援軍、大砲などの武器や弾薬、食糧が夥(おびただ)しく運び込まれていたのだ。

「どうする？」

私は問うた。ハナは、ややあって答えた。

「戦うしかない」

それから、支那語で宋紀に指示を与えた。宋紀は頷(うなず)き、出て行った。

「清国軍はあてにならない。かといって、あたしたち馬賊を全部かき集めても、本気でかかってくるコサックに太刀打ちは無理。瑷渾(あいぐん)の住民は、斉斉哈爾(チチハル)に逃がすよう、今、指示を出した」

斉斉哈爾(チチハル)は、瑷渾(あいぐん)から約五百キロ南西にある新開地だった。ロシアと清を結ぶ東清鉄道の駅に選ばれてから、急激に人口が増え、日本人も少なくない。何より、斉斉哈爾(チチハル)にはハナの仲間の馬賊が経営する旅館がある。

「とはいえ、瑷渾(あいぐん)の住民すべてを逃がすためには、誰かが残って、ロシア軍と戦い、時間を稼がなくちゃいけない」

ハナは、私を見つめて言った。

「それを、私がやる」

「太太(タイタイ)……」

ソヒョンが言った。

「何人で、戦う？」

「そうだね」

ハナは俯(うつむ)いて笑った。

「百人かな」

私は眼を見開いた。ソヒョンも悲痛な眼差しでハナを見つめている。

たった百人の馬賊で、はるかに装備が優勢な、数千のロシア軍を相手にしなければならないのか？

強(こわ)ばった私の顔を見て、ハナは笑った。
「勝ち目もない、生き伸びるのも無理。そんな戦いに、あたしのために協力してくれる馬賊の人数は、そんなもんだと思う」
自分も一緒に……。
そう言いかけた私とソヒョンを、ハナは手で制止した。
「お前たちには、別の仕事をやってほしいんだ」
ハナは言った。
「ブラゴベシチェンスクに帰って、ロシア軍のいちばん偉い奴を殺してくれ」
ニコラーエフ中将の事だった。支那人虐殺を命じた最高司令官だ。
「それで、無事、生き延びられたら……」
ハナは、寂しげに言った。
「ユキを探し出して、幸せにしてあげて」
私は、そっとソヒョンの顔をうかがった。
釜山での出来事は、まだハナには語っていない。彼女の親友だった三原ユキを、井口虎吉らとともに手込めにした橋口平助(はしぐちへいすけ)が、なぜかユキと並んで撮った写真を持っていた事、本来、私たちが釜山に渡ったのは、静枝や春美を安全な場所に避難させるとともに、橋口平助に復讐を果たすためだったのが、それができぬまま、平助は虎に喰われた事にされてしまった事……。
「どうせ、橋口平助は見つからなかったんだろ？」
ハナが、困惑を押し隠そうとする私たちに向かって微笑んだ。
「今となっちゃ、橋口平助のことなんか、どうでもよくなった。ただ、ユキには無事でいてほしい」
それから、伏し目がちに言った。
「もう命が長くないと分かったら、憎らしい奴に復讐するより、友だちが一人でも無事であってほしいって気持のほうが強くなるもんだね」
「だめ」
ソヒョンが涙声で叫んだ。
「太太(タイタイ)、死ぬ、だめ。ハナ오니(オンニ)（姉さん）、絶対だめ」
「わかってる」
ハナは、ソヒョンを抱きしめて言った。
「あたしが死なないですむためにも、やってくれないか。大将が殺されればロシア軍は混乱する。少しでも時間を稼いで、なるべく大勢、なるべく遠くに逃がしてやりたいんだ」
それから、私を見て言った。
「あたしだって、生き延びて、ユキを探し出したい。橋口平助に復讐できるものなら、したい。だから、言うとおりしてくれないか」
翌日、私とソヒョンは、去勢された中隊長やドイツ観戦武官とともに、小舟に乗せられ

た。漕ぎ手はいない。私は、ドイツ観戦武官とともに必死に櫂を動かし、対岸のブラゴベシチェンスクへ渡った。

川岸に、ハナが宋紀たちを従え、私たちを見送った。櫂を動かしつつ、私は、じっとハナを見つめ続けた。

今生の別れになるかもしれないのだから。

馬にまたがったハナは、身じろぎもせず、私たちを見つめていた。

「よくぞ戻られた」

舟を降りると、十数人の部下を率いて出迎えたのは、軍務知事のニコラーエフ中将だった。軍医に命じて中隊長を病院に運ばせた後、

「申し訳ないが、話を聞かせてほしい。一緒に来てくれ」

と私とドイツ軍観戦武官を見比べながら言った。中将の部下たちが、私たちを取り囲むように並んだ。

なるほど、口を封じる気か……。

歴戦のコサック一個中隊が、若い娘が率いる馬賊によって全滅した事は、昨日送還された生き残りのコサック兵によって、すでに報告が入っているはずだった。ニコラーエフ中将としても、自軍の無様な失態――ただ、負けただけでなく、中隊長含め十人以上のコサック兵が女に去勢されたのだ――を、外に知られたくないだろう。

しばらく、軟禁状態に置かれるかもしれない。そう思いつつ、無言で付き従った。

連れていかれたのは、コサック軍団司令部に近いホテルだった。玄関にも、その周囲にも、多くの兵が警備にあたっている。私たちは、一人ずつ別の部屋に入れられた。外は危険だから外出を控えるように言われた。ドイツの観戦武官たちは、モスクワの総領事に連絡をするから電報を使わせるよう要請していたが、ニコラーエフ中将に、こちらから連絡を入れておく、と拒絶された。

食事は、一階の将校専用食堂でとるが、私たちとドイツ観戦武官の席は隔たったところに指定され、その間にコサック将校が座り、接触しづらい雰囲気だった。

「菊池さん」

夕食のボルシチに黒パンを浸して口に運びながら、ソヒョンは言った。

「兵隊、大勢集まってる」

「そうだな……」

部屋の窓から見ていても、各地からコサック兵が集められている様子が見て取れた。大砲や武器、弾薬も、船で大量に運び込まれている。

ニコラーエフ中将は、これを機会に、ロシアの勢力圏をアムール川を越えて清国側にまで拡げ、瑷琿だけでなく多くの都市を制圧し、手柄にしようとしているのだろう。

「菊池さん、気づいたか？」

ソヒョンが思い詰めた面差しで囁いた。

「何を？」
「あの男、あたしに気(き)がある」
私は、思わず十二歳のソヒョンを見つめた。ソヒョンは、静かに黒パンを口に運び、噛みしめて嚥(の)み下した後、静かに言った。
「あたしを、あいつに、差し出せ」
あいつ？
差し出せ……？
「一番偉いひと」
ニコラーエフ中将か？
「男のひと、かわいい女、弱い」
ソヒョンは、面(おも)ざしひとつ動かさず言った。
「あたし、かわいいだろ？」
「しかし……」
私は、周囲に悟られぬよう必死に冷静な面持ちを保ちながら言った。
「君は、まだ子供だ……」
「でも、あたし、何人かと、寝た」
寝た……？
「차다(チャダ)（性交した）……、日本語、寝た、でいいのかな？」
明るい面差しを保って、ソヒョンは言った。
まさか、まだ十二歳のソヒョンが……。
呆然とする私の肩をたたいて、ソヒョンは笑った。
「好きな人いる、寝る、不思議じゃない」
「いるのか？」
「いたよ」
ソヒョンは懐かしそうに頬杖(ほおづえ)ついて、微笑んだ。
「馬賊の子。私より三つ上」
「そうなのか」
「死んだけどね」
驚いた私に、ソヒョンは付け加えた。
「菊池さんが来る、少し前、コサックに殺された」
氷のように面差しをこわばらせ、ソヒョンは続けた。
「ロシアの大将、殺す、私の復讐。ハナさん、それ知ってる」

翌日。
私はソヒョンを伴ってロシア軍司令部に赴き、ニコラーエフ中将を訪ねた。太ったロシアの五十男は、私ではなくまずソヒョンに眼差しを走らせ、唇を歪めて、にたにた笑った。

十分ほどの会話の後、独りソヒョンを中将の部屋に残し、私は司令部を出た。
その日から三日間、ソヒョンはホテルに戻らず、私は部屋で煩悶しつづけた。
あれでよかったのか？
早熟で聡明、格闘術にすぐれ、性体験もそれなりに豊富とはいえ、まだ十二歳の少女に、ロシア軍の司令官暗殺を委ねてしまったのだ。しかも色仕掛けという最低の手段によってだ……。
まるで女衒ではないか！
私は時にいたたまれず、髪の毛をかきむしりながら部屋を歩き回った。ウォッカの勢いを借りないととても眠れず、深酒をしてしまい、翌朝は二日酔いに悩まされた。
そして、四日目の夕方近く、部屋がノックされた。
「菊池さん」
ソヒョンの声だった。どこから忍び込んできたのだろうか。私は飛びつくようにドアを開けた。
彼女は、ふだんと変わらない、明るく聡明な笑顔で私に告げた。
「明日、朝、ロシア軍、河を渡る」
いよいよ総攻撃なのか……。
「でも、させない」
そう言い残して、ソヒョンは去っていった。
窓から見ると、続々とコサック部隊が、隊伍を組んで船着き場へと向かっていった。重そうな大砲や弾薬、食料品を積んだ荷車とともに。
少なくとも、二千はいる。装備も、百五十の兵力で渡河した時とはくらべものにもならないくらい充実していた。瑷琿はじめ、対岸の清国側の都市は、焼け野原になるだろう。観戦は許可されなかった。ブラゴベシチェンスクで起こった虐殺が、またも繰り返されるのだろうか。
そんな事を考えながら寝られぬ夜を過ごし、朝となった。部屋の外で靴音がやかましく響いた。ドアを開けると、廊下ではコサック兵たちが右往左往していた。食堂に行くと、コサック将校たちが何事かわめきあっている。
「Что за шум（いったい、なんの騒ぎだ）？」
一人のコサック将校に問うと、こんな答えが返ってきた。
ニコラーエフ中将が、殺された、と。
やったのか……。
私は慄然とした。
十二歳のソヒョンが、ロシア陸軍の中将であり、ブラゴベシチェンスクの軍務知事であるニコラーエフを……。
コサック将校たちの会話が耳に入ってきた。
殺したのは女だって？

睾丸を潰されたらしいぞ。
ほんとうか、信じられない？
「ＯＨ（彼です）！」
ロシア語の叫びが耳に入ってきた。一人のコサック将校が私を指さし、その背後に三人のロシア軍憲兵が立っていた。憲兵たちは私に歩み寄り、敬礼した。
「あなたは、菊池中尉ですね。我々について来てください」
「なんの用でしょうか？」
「司令部でお話しします」

ロシア軍司令部に併設された憲兵隊司令部に入ると、狭い部屋に案内された。部屋の隅にテーブルが一つ置いてあり、そこに坐っていたのはソヒョンだった。いつもの朝鮮服でも、支給された水兵服でもなく、真っ赤なパーティドレス姿だった。
部屋に入ってきた私を見る彼女の眼は、驚いた事に、怯えきっていた。今まで、彼女が見せたことのない眼差しだった。よく見ると、左の頬が赤く腫れあがり、唇に切り傷が残っている。中将を殺害した際、抵抗されてついた傷だろうか。
「わざわざ、申し訳ない」
憲兵司令官が部屋に入ってきて敬礼した。私はソヒョンと並んで坐り、司令官は向かい合った席に腰をおろした。
「ニコラーエフ中将が殺害された件は、すでにお聞き及びだろう」
「Ｄａ（はい）」
そう言って頷くと、司令官は、ソヒョンを見やって続けた。
「この娘は、犯人を見たらしいのだが、衝撃で、口がきけなくなったようなのだ」
犯人を見た？
ソヒョンが殺したのではないのか？
思わずソヒョンを見やったが、彼女は俯いたまま瞬きもせず床を凝視している。司令官は続けた。
「犯人は、支那の女だという事は分かっている」
「支那の……？」
「間違いなく、マラトフ大尉ほか、幾人もの仲間を殺害した義和団の女だ」
ソヒョンが唇を噛みしめるのが眼に映った。
まさか、中将を殺したのは、ソヒョンではなく、紅灯照の劉春燕なのか……？
司令官が言った。
「犯人は逃走する際、我が軍の将兵三人に暴力を揮った。犯人は彼女で間違いない。ただ、私たちとしては、中将殺害の模様を書類で報告しなきゃならない。そのためには、この娘の証言が必要です」
硬い面差しで俯くソヒョンに眼を遣り、司令官は続けた。

「とはいえ、今すぐ尋問するのは無理でしょう。まずはゆっくり休ませてあげなさい。そして、彼女が回復して口がきけるようになったら、連絡をください」
もう帰ってよいというので、私はソヒョンを連れて外に出た。とりあえずホテルに戻ったが、その間、彼女は怯えた面差しのまま、何もしゃべらなかった。
ホテルの部屋に連れて行き、ベッドに座らせて、ドアを閉めたとたん、
「菊池さん」
ソヒョンが口を開いた。
「あたし、しくじった」
さきほどまでの怯えた面差しは、憲兵たちに向けて作った芝居だったようだ。ソヒョンはベッドを飛び降り、私に向かい合って立った。眼に涙が浮かんでいる。
「大変なことになる」
……昨日の夕方。
ニコラーエフ中将の部屋では、宴会が開かれる事になっていた。軍幹部たちが集まり、街の娼婦を呼び寄せ、ロシア式の乱痴気騒ぎをやるのが慣わしだったのだ。レストランから取り寄せたワインや料理がテーブルに並べられた。
ソヒョンは、この宴会の場で、ニコラーエフ中将ともども、ロシア軍幹部を全員殺害する事に決めていた。最高幹部全員が殺害されれば、ロシア軍は混乱に陥り、瑷琿攻撃は少しでも延期されるだろう。
宴会には、自分も出席したいと申し出、中将の承諾を得たソヒョンは、パーティドレスに着替えさせられた。ソヒョンは、太もものガーターベルトに愛用のナイフを忍ばせ、客が来るのを待った。
――Здравствуйте（こんにちは）！
甲高い女の声がドアのところで響き、入ってきたのは派手な厚化粧の女だった。胸ぐりの深いドレスをまとい、金髪のかつらをつけている。
だが、その顔立ちは、ロシア人ではなかった。細面に切れ長の一重瞼。あきらかに支那人だった。
劉春燕だった。
春燕は、中将の首に両腕を回した。ドレスからのぞく長い脚が、中将の股間を狙っていた。ソヒョンは愕然として、鼻の下を伸ばして出迎える中将と、女との間に立ち塞がろうとしたが、間に合いそうにない。
――бегги（逃げて）！
ソヒョンが叫ぶのと、中将が悲鳴をあげ、両手で股間を押さえてうずくまるのが、同時だった。
太ももからナイフを引き抜き、ソヒョンは、春燕に飛びかかった。同時に、春燕の細身の身体が跳躍した。空中で一回転した彼女の足が、ソヒョンの左頬に炸裂した。ソヒョンの体は宙に浮き、壁に叩きつけられた。さらに、春燕は、仰向けになったソヒョンの股間

と、膨(ふく)れはじめた胸乳(むなち)に左右の踵(かかと)を叩きつけた。ソヒョンは激痛にのたうち回った。
やっと痛みを堪(こら)えて立ち上がった時には、ニコラーエフ中将はイスに縛りつけられていた。ズボンの股間が引き裂かれ、血が噴き出していた。切断されたペニスが口に詰め込まれた中将は、白眼を剥(む)き、すでに絶命しているようだった。春燕は、ニコラーエフ中将に悲鳴ひとつあげさせず、残酷な「処刑」を完遂したのだ。
ドアがノックされた。野太い複数男性のロシア語だった。
春燕は、ソヒョンを見やって笑みを作って言った。
――如你所見(ルゥーニイスゥオヂィエン)、作証(ヅゥゥオヂァン)（見たとおり、証言なさい）。
ドアが開き、三人の将校が入ってきた。客として招かれた軍幹部だった。ニコラーエフ中将の無惨な死体に眼を見張った彼らは、次々と股間を蹴り上げられ、床に倒れて七転八倒した。
彼等を冷たく一瞥(いちべつ)し、とどめは刺さず、春燕は悠々と部屋を出た。
わざと、目撃者を作ったんだ……。
春燕が静かにドアを閉めて外に出たとたん、廊下でまた一つ、呻き声があがった。明らかに急所を蹴られた男の声だった。
ソヒョンは、なんとか立ち上がろうとした。春燕を追うのは無理だとわかっていた。せめて、彼女に急所を蹴られたロシアの軍幹部たち――最初から殺害するつもりだった――の息の根を止めたかった。そうしなければ、次に起こる事態は……。
義和団の女に、司令官を殺害され、幹部が幾人も股間を蹴り上げられたのだ。ロシア軍にとってこれほどの屈辱はない。
報復は、凄まじいものになるだろう。それだけは止めなければ。そう念じながら必死に立ち上がろうとしたが、少しでも体を動かすと、全身に激痛が走る。激痛と悔しさ、思うように体を動かせない悔(くや)しさに泣き叫んでいたソヒョンの耳に、やがて部屋に入ってきた多くの靴音が響いた。
駆けつけたロシア将兵たちだった。ソヒョンは大勢の手で部屋から運び出され、ロシアの軍医室に連れていかれ、手当てを受けた。
そして夜が明け、私に引き渡されたのだった……。
「菊池さん」
ソヒョンは、ぼろぼろと涙を流しながら言った。
「早く、瑷琿(あいぐん)に行きたい。ロシア軍、今日にも瑷琿、攻める。大勢、殺される。ハナさんが危ない」
私は、ニコラーエフ中将の後釜(あとがま)に坐ったグリーブスキー中将に、観戦武官として随行する事を申し出たが、却下された。
「清国側の諸都市には相当数の義和団が入り込んでいるだろう。彼らは危険だ。あなたたちの身の安全は保証できない」
そして、二日後、グリーブスキー中将率いる三千のロシア軍は、大砲六門とともにアム

ール川を渡った。
ホテルの窓からは戦況は分からなかったが、さかんに砲撃の音が響いていた。砲艦が川から掩護の砲撃を清国側諸都市に撃ち込んでいるのだ。
やっと観戦の許可が下りたのは三日後だった。アムール川からの掩護砲撃は止んでいたので、戦闘はすでに終わったのだろう。私とソヒョンは、ドイツの観戦武官とともに、ロシア軍の船で対岸へと渡った。
船が瑷琿に近づくと、煙が漂ってきた。瑷琿を囲んでいる城壁から、黒煙がわき上がり、空にたなびいていた。
瑷琿の城内は、破壊しつくされていた。
城壁の外に並んでいた、掘っ立て小屋のような清国兵の兵営は、すべて焼き払われ、木炭と化してぶすぶすと煙を発していた。城門をくぐると、清国から派遣された官吏が詰める都統府や、周囲に配置された軍隊を統括する鎮守使公署などの官署もまた、砲撃を浴びて瓦礫と化していた。市街地で、無事に残っている家はなかった。大砲で破壊されたか、ロシア軍によって焼き討ちされたか、いずれかだった。
ただ、清国兵や地元住民の死体が見あたらなかった。日清戦争で経験したが、砲撃で破壊された都市は、夥しい死体の腐臭が、息もできないくらい満ちるものだ。
ところが、ここまで破壊しつくされたにも関わらず、建物の木材が焼けこげた匂いしかしない。
私とソヒョンは、聚英桟へと向かった。かつては食堂や居酒屋が並び、夜になれば極彩色の提灯や雪洞で華やかに飾られていた通りは、あるいは砲弾を浴び、あるいは火を放たれ、かつての面影はまったくなかった。
聚英桟も例外ではなく、一面瓦礫の山だった。
瓦礫のなかに、ずたずたに裂けた日章旗が埋もれていた。ハナは、日本の国旗を掲げることで、少しでも戦禍を免れようとしたが、ロシア軍の無差別砲撃の前では、蟷螂の斧に等しかったようだ。
ソヒョンは無言で立ちつくしていたが、やがて顔を被って泣き出した。両親を殺害され、ハナに拾われて以来五年、彼女はここで小間使いとして働き、馬賊として鍛えられてきたのだ。
私も言葉を失い、ソヒョンを見守るしかなかった。
「Привет господин Кикути（やあ、菊池さん）！」
振り返ると、顔見知りのコサック下士官だった。二名の同僚とともに、銃を肩に担いでいる。彼も三日前、ロシア軍の一員としてブラゴベシチェンスクを出発したはずだった。
「無事だったんだね」
と声をかけると、肩をすくめて言った。
「無事もなにも、来てみたら蛻の殻だった」

聞くと、ロシア軍はまず、瑷琿の周囲にある黒河鎮などの町や村を攻撃した。清国軍はすでに逃げ去っていた。ロシア軍は逃げ遅れた一般市民を虐殺し、掠奪をおこなった後、清国軍司令部のある瑷琿に向かった。

ところが、瑷琿城の門をくぐると、市内は無人だった。清国軍どころか、貧しい一般市民も残っていなかったのだ。気抜けしたコサック兵たちは、裕福そうな屋敷に侵入し掠奪を行おうとしたが、めぼしいものはほとんど残っていなかった。中将は、避難民の追撃を命令した。

「残念ながら、俺はお留守を命じられた。大損だ」

と自嘲する下士官は、私としばし談笑した後、仲間とともに去っていった。

「菊池さん」

下士官の姿が見えなくなるのを待ち、ソヒョンは立ち上がった。

「あたし、山塞に行く」

瑷琿から馬で三日の距離にある馬賊たちの根城のことだ。ハナたち馬賊のリーダーである高老爺も、そこに住んでいる。

「もしかしたら、ハナさん、そこにいるかも」

確かにそのとおりだ、と私は思った。たとえ、ハナがいなくても、行方を知っている馬賊の仲間に会えるかもしれない。

私はさっそく、唯一無疵で残っていた役所に置かれたロシア軍司令部に出向き、近隣の村を見て回りたいので、軍馬を貸してほしいと申し出た。

「ニコラーエフ中将の寵愛を受けていた娘が、中将を殺した支那人たちが報復を受けた村を見たいというのです」

と、ソヒョンが考えついた「動機」を説明すると、彼女を見知っていたらしいグリーブスキー中将は、

「そうか、あの朝鮮娘は、そんなに中将を慕っていたのか」

と深く頷き、快く軍馬と糧秣を提供してくれた。その日のうちに、私とソヒョンは瑷琿を出発した。

その後、私とソヒョンは馬を走らせ続けた。途中、ロシア軍に攻撃された街や村を通過した。支那人の屍が広場に集められて焼かれたり、掘った穴に埋められていた。

三日後、山塞に着いた私たちが見たのは、焼き討ちにあい、徹底的に破壊された残骸だった。山の斜面に穴を掘り、草屋根で覆って内部に温突を設けた支那式の部屋が、二十ばかりあったのだが、ことごとく掠奪され、焼かれていた。

人影はなかった。そこに住んでいたはずの馬賊の姿はおろか、焼き討ちしたロシア軍もすでに去った後だった。

「ここも、死体、ない」

ソヒョンが明るく弾んだ声音で言った。確かに、穴を掘って埋めたり、集めて焼いた形

跡がない。
「ロシア軍、来るのを知て、みんな、逃げた。無事でいるといいな」
そう言ってソヒョンが私に笑顔を向けた時、
「菊池大人！　ソヒョン！」
声の方を振り向くと、ハナの一の子分の宋紀が、信じられないという面持ちで馬に乗っていた。
「宋紀！」
ソヒョンは、宋紀に駆け寄り、馬から下りた男と抱擁し合った。
「你没事就好（無事だったのね、よかった）！」
宋紀は無言で涙を流していた。私も歩み寄って抱擁をかわした後、
「ハナさんは？」
と問うと、宋紀は、分からない、と首を横に振り、これまでの経緯を語り始めた。

……ロシア軍が、瑷琿に砲撃を開始する数日前。
いよいよロシア軍が侵攻してくるとの噂が伝わると、瑷琿に駐屯していた清国兵たちは雪崩を打つように逃亡しはじめた。富裕な者は家財道具をまとめて逃げだし、ついには都統府の官吏までが、倉庫から金や貴重品を持ち出そうとした。瑷琿の全市街は混乱状態に陥った。
ハナは聚英桟にとどまり、周囲の村から逃げてきた避難民保護に当たっていたが、やがて掠奪騒ぎが起こった。清国軍司令官が部下の兵たちに命じて家々を襲わせ、金品を奪って逃亡しようとしたのである。
兵たちは聚英桟にまで押し寄せてきた。宋紀たち馬賊はハナの指揮の下、兵士たちを追い払った。守るべき民衆から掠奪しようとする清国軍に激怒したハナは、鎮守使公署に置かれた司令部に乗り込んだ。
司令官は不在で、代わりに応対したのは劉謙徳という営長（大隊長）だった。ハナの抗議に耳を傾けた劉営長は、清廉潔白な男だった。
――私も、司令官はじめ自分も清国軍の腐敗には憤っていたのだ。
と告げた劉営長に、ハナは、
――今後、私たち馬賊と協力して、瑷琿の民を守りませんか。
と訴えた。劉営長は承諾し、
――軍内部で同志を募る。力を合わせて、多くの民の命を救おう。
と誓い合った。
劉営長の動きは速かった。同心してくれる将兵を動かし、略奪に耽っていた清国軍司令官や軍幹部、富裕な者たちを逮捕した。司令官は死刑に処し、他の者には奪った金品を返還させた上に、もともと貯め込んでいた財産を一定程度残して没収し、貧しい民に平等に配った。逃げ出したくても、頼るあてもなく、逃亡のための資金もなく、この地に止まら

ざるを得なかった民衆に、生き延びるための糧を与えたうえで、南の斉斉哈爾に逃げるよう指示した。

斉斉哈爾までの街道は、たちまち避難民でぎっしりと溢れた。ハナは馬賊たちに、彼等を警護するよう命じた。ロシア軍の砲撃が始まった時、すでに瑷琿の市民はすべて、無事に脱出していた。砲撃が終わり、ロシア軍がアムール川を渡って上陸してくると、ハナら馬賊と劉営長の部隊は、これに抵抗した。

段違いに優勢な装備を誇るロシア軍相手に、ハナと劉営長はよく戦った。だが、次第に劣勢になり、劉営長は戦死し、彼の部隊はちりぢりになった。ただ、南へ逃げる避難民のため、時間を稼ぐことはできた。

その後もハナは、避難民を追撃するロシア軍と戦い続けた。

ロシア軍は、避難民がひしめく街道に出没し、不意に現れては延々と続く人の群れの脇腹をつくように銃弾を浴びせ、倒れた避難民からめぼしいものを剥ぎ取り、娘たちを拉致して去っていくのだった。

ハナは、百人ほどの馬賊を従え、避難民とともに南へ向かい、襲撃してきたロシア軍を追い払っていたが、数万を超える避難民すべてを保護する事などできるはずもない。

やがて、用意していた食糧もつきた。ハナの回りにいる馬賊も、次々と戦死し、宋紀をふくめて五人ばかりになった。不眠不休で戦ってきたハナは、馬で移動しながら、居眠りすることも多くなった。

瑷琿を脱出して四日目の夕方、ついに力尽きたハナは馬から降り、街道脇の森に入り、大木の幹に背をもたせかけ、眠りこんだ。

常にハナに付き従っていた宋紀は、他の馬賊たちに、避難民とともに斉斉哈爾まで進むよう命じ、自分はハナの傍らで銃を構えて警護していたが、やはり、連日の戦いの疲れから眠ってしまった。

宋紀が眼を覚ました時、朝になっていた。傍らを見ると、そこにいたはずのハナの姿がない。慌てて見廻すと、やや離れた場所で、ハナが小銃を構え、地面を見下ろすように立っていた。銃口の先に、細いからだを豪奢な支那服に包み、厚化粧をした若い美女が坐り込んで震えている。

「帮助我（助けて）……」

女は胸に、生まれたばかりであろう赤児を抱いていた。

「太太（女主人）！」

その女を見て、宋紀は驚いた。その女は、瑷琿の市民を助けるどころか、ロシア軍の攻勢に逃げる前に、兵を使って市民から略奪していた清国軍司令官の妾だったのだ。

彼女は、高飛車な態度や金遣いの荒さで知られ、名うての嫌われ者だった。司令官が処刑され、不正蓄財を没収される際、泣きわめいて最後まで抵抗した。

「お前、さんざん、いい思いしていたんだろ！」

ハナは、怒鳴った。

「それなのに、あたしに助けてほしいだって？　いい加減にしな！」
ハナが引き金にかけた指に力をこめようとした瞬間、女の胸で、赤児が泣いた。同時に女が叫んだ。
「いいわ、私を撃ちなさい。どうせこれ以上、歩くことなんてできやしない」
女の着衣の裾から、纏足がのぞいていた。幼い時、足が成長しないよう包帯できつく縛られた。そのため、成長した身体を幼児の時と同じ大きさの足で支えねばならず、歩くときは、つま先立ちのように膝を曲げた不安定な姿勢になる。まして、走る事もままならないのだ。
女は、眼に涙を浮かべ、ハナに懇願した。
「でも、この子だけは助けて！」
引き金にかけたハナの指が、動きを止めた。女は、ハナの足を見つめながら、さらに続けた。
「私と違って、あなたはちゃんと歩ける。あなたにお願いするしかないの。どうしても、この子だけは助けてあげて！」
「あの司令官の子供か？」
「違うわ！」
女は首を振った。
「この子は、道端で泣いていたの。その側で、母親らしい女の人が殺されていた。あんまりかわいそうだから、拾ってあげたの……」
ハナは、意外そうな面持ちで、しばらく女を見つめていた。その瞳が揺れ動いていることに、宋紀は気づいた。
「助けたいのなら……」
やがて、ハナは口を開いた。
「歩け」
そう言ってハナは、女の腕から赤児を奪い取り、胸に抱いて歩き出した。
纏足の女は立ち上がり、よちよちと必死になってハナについていった。
その森は、ハナや馬賊たちにとって通い馴れた場所だった。所々に隠し倉庫を設け、食糧や武器を貯えていた。だが、二時間ほど歩いて、いちばん近い隠し倉庫に来てみると、食糧も武器も何物かに奪われた後だった。
近くの泉で水を飲み、空腹をわずかに宥めるしかなかった。纏足の女は、ハナから赤児を受け取り、乳をふくませたが、母乳が出るはずもない。やがて赤児はむずかって泣き声をあげはじめた。
「行くよ」
いくらあやしても泣きやまぬ赤児を胸に抱き、途方にくれたような纏足の女を、ハナは促した。
女は立ち上がろうとして、すぐに坐り込んだ。足が痛んで、歩くどころではないようだ

った。ハナは問うた。
「お前、家はどこなの？」
「墨爾根」
女は苦しそうな声で答えた。瑷琿から百キロ南西にある都市である。急いでも三日はかかる。纏足で、しかも赤児連れだ。足手まといになることは明らかだった。ハナは宋紀に目配せし、無言で歩き出した。
「太太！」
ハナの背後で女が叫んだ。
「後生ですから、この子だけでも……」
振り向くと、女は赤児を両腕で支え、前に突き出していた。
「墨爾根の 徳 宗 泉 の家まで届けて下さい」
その名を聞いて、ハナは足を止めた。面差しが強張った。女は続けた。
「私は、徳宗泉の娘です。私が生んだ子だといえば、きっと父はお礼を弾むはず。お願いです。この子を、どうか……」
――徳宗泉は、砂金の取引で儲けていた、墨爾根でも有数の富豪だった。
六年前のある夜、ハナは、宋紀ら三十数名の馬賊とともに、その屋敷を襲撃した。主人の徳宗泉をはじめ、家族や使用人を縛り上げ、数万両の金を奪ったのだ。
ハナにとっては、初めての襲撃参加だった。高老爺からは、何もせず見ているように強く命じられていた。小銃は与えられず、護身用に拳銃一挺だけ携帯することが許された。先輩の馬賊たちが手際よく侵入し、家人を銃で脅して拘束するのを、内心の怯えを押し殺しながら見ていた。時々、「これを運べ」「こいつを蔵に押し込めておけ」と命ぜられるまま、無我夢中で働いた。
ふと気が付くと、いつしかハナは、屋敷内の狭い小部屋で一人、取り残されていた。月明かりしかない闇のなかで、押さえつけていた恐怖心がこみ上げてきた。
ごとりと背後で足音がした。反射的にハナは拳銃を引き抜いていた。人影が室内に入ってきた。引き金にかかった指が、自動的に動いた。銃声が響き、人影は仰向けに倒れた。
「どうした！」
仲間の馬賊が駆けつけた。ハナは坐り込み、震えていた。倒れたのは、年老いた女性の使用人だった。その胸に赤児が抱きしめられていった。ハナが放った弾丸は、赤児の頭と女性使用人の心臓を貫通し、死に至らしめていた。
ハナは絶叫した。地面に転がり、大声で泣き叫んだ。掠奪を終え、引き揚げる時も、馬を走らせながら号泣していた。
その後、ハナは多くの富裕な家を襲撃したが、ただ一人の死者も出さなかった。だが、あの時誤って赤児を撃ってしまった事、引き揚げる際、赤児の死体を抱いた母親らしい女の、怨みの籠もった眼差しが忘れられない。そう宋紀に漏らした事もあった。
纏足の女は、そんな因縁のある徳宗泉の一族の女だったのだ。

「お前の名は？」
ハナは、差し出された赤児を受け取り、纏足の女に問うた。
「小芳（シャオファン）」
女は小声で答えた。
「宋紀！」
ハナは命じた。
「この女をおぶってやれ」
宋紀は、少しの躊躇（ためら）いも見せず、小芳を背負った。小芳はしきりに「謝謝（シェイシェイ）、謝謝（シェイシェイ）」と繰り返した。
次の隠し倉庫には、まだ食糧が掠奪されずに残っていた。三人は米を炊（た）き、久しぶりの食事にありついた。小芳は米の煮汁をさまして、赤児になめさせた。
その日の夕方、馬賊が休息地に使っている番小屋にたどり着いた。番小屋の留守を守っているのは、張（チャン）という老いた馬賊だった。
「太太、それに宋紀も！」
張は驚いてハナと宋紀、そして赤児を抱いた小芳を小屋に迎え入れた。お腹すいたことでしょう、と言いながら、竈（かまど）に火を入れ、鍋で炊いた粥（かゆ）をふるまった。
「街道の様子はどう？」
と問うと、張は、
「街道はいけません。ロシア軍が続々送り込まれています」
さらに、ロシア軍に協力する支那人も現れた。馬車で軍需物資を運搬したり、金品や食糧を提供している、と張は歎（なげ）いた。
「赤ん坊連れで墨爾根まで歩くなんて無理だ。とにかく、どこかで馬車をあつらえてきますから、それまではゆっくり休んでいてください」
小芳は床に額をついて、「謝謝（シェイシェイ）、謝謝（シェイシェイ）」と繰り返すばかりだった。
翌々日。張が手に入れた馬車に乗って出発した。ロシア軍を避けるため間道を通って墨爾根に至ったのは、その三日後だった。
「太太は命の恩人です」
徳宗泉と横書きに大書した看板が掲げられた邸の門前に立ち、小芳は幾度も幾度も頭をさげた。
「ぜひ、お礼がしたいの。今夜は泊まっていってください」
ハナと宋紀は顔を見合わせた。六年前の襲撃には、ハナだけでなく宋紀も加わっていたのだ。顔を覚えている者がいないとも限らない。
「哎呀（アイヤー）、小芳（シャオファン）（あら、小芳じゃないの）！」
門の扉が開き、現れたのは三十手前の女だった。小芳の顔を見るなりそう叫び、抱きついた。
「你没事就好（ニイメェイシィーチオウハオ）（無事だったのね、よかった）！」

「姐姐（姉さん）！」
小芳は女の首にしがみついて、涙を流した。
ハナと宋紀は、棒立ちになった。
小芳が姉と呼んだその女は、六年前、ハナが誤って射殺してしまった赤児の母親だったからだ。
「あの人たちが、助けてくれたの」
小芳が、背後を振り返ってハナと宋紀を指さしてそう言った時、ハナの唇は細かく震え、膝が震えていた。
「そうなの……」
小芳の姉は、今にも泣き出しそうな面差しで、ハナに歩み寄り、その手を取った。
「どなたかは存じませんが、ありがとうございました！」
「姉さん、ぜひ、今夜は泊まってもらいましょう。できるだけご馳走してあげて！」
と言う小芳に頷きながら、小芳の姉は、ハナをかき抱くようにして、
「どうか、お入り下さい」
と邸のなかに引きずり込んだ。
気づかれていないようだ。ハナはそっと宋紀と眼を合わせ、安堵の吐息をもらした。
その夜、主人の徳泉宗はハナと宋紀のため宴席を設けた。同席したのは小芳とその姉のみだった。使用人も老人が一人いるだけで、広壮な邸はほとんど掃除も行き届かず、荒れている。出された夕食も質素なものだった。
小芳が姉と呼んだ女性は、その名を水縁といい、小芳の兄の妻だということだった。なぜ夫が同席しないのか不審に思っていると、
「六年前、この家は馬賊に襲われましてね」
顔を強ばらせたハナと宋紀に、徳宗泉は説明した。その時、水縁が生んだばかりの赤児が射殺された。第一子の誕生を喜んでいた水縁の夫は、それをきっかけに心を病んでしまった。商売にも行き詰まり、家は貧しくなる一方だった。同居していた一族も次々と離れていった。そして水縁の夫は、行き先を悲観して二年前に自殺した。以後、すでに老いていた徳泉宗は、鬱々と日々を送るのみだった。
小芳が清国軍司令官の妾となることで、この一族はやっと生計を繋いでいた。彼女がひとの憎しみを買うほど蓄財に励んだのは、一族を養うためでもあったのだ。
「そんな事もあって、馬賊に対して深い恨みを持っていたのですが、この度の騒ぎでは、多くの馬賊が同胞をロシア軍から守ってくれたとのこと。いや、わからぬものです」
夕食が終わり、寝室に通された。部屋に入って扉をしめるやいなや、ハナは、宋紀に告げた。
「逃げるよ」
驚く宋紀に、ハナは言った。
「あの水縁という女……あたしが、あの時の馬賊だって気づいてる」

ハナの眼から涙が溢れ出した。ぬぐいもせず、ハナは続けた。
「徳宗泉が六年前の話をしている時、水縁の眼が、一瞬光った。あたしを恨(うら)んでた。恨まれて仕方ないことを、あたしたちはやってしまったんだ」
もし自分が水縁だったら、自分たちが寝入ったのを見計らい、ロシア軍に密告する。そうされる前に逃げよう。
「さもないと、あたしはまた、ここで誰かを傷つけなきゃならなくなる。それだけは絶対にしたくない」
宋紀は頷いた。すぐに荷物をまとめて背負い、窓から庭に出た。足音を忍ばせ闇のなかを走り、門を出た二人は、その場で棒立ちになった。
門の外の道路に、十人ほどのコサック兵が隊列を組み、こちらに向かって歩いていた。その先頭に立って案内しているのは、水縁だった。
ハナと宋紀に気づいた水縁は、彼等を指さし、何か叫んだ。
「宋紀！　あたしと逆方向に逃げろ！」
言うなりハナは、コサック兵たちに向かって走り出した。コサック兵たちは、銃を背負ったままで、撃つ準備はできていない。ハナは躊躇(ためら)わず、狼狽して背から銃を引き抜こうとするコサック兵の一人に接近し、その股間を蹴り上げた。
「原諒我(ユエンリアンウォー)（許して）！」
悲痛な面差しで、水縁に向かってそう叫び、ハナが闇に向かって駆け出したとき、その背後では三人のコサック兵が両手で股間を抑えて地面を転がり、残る七人はやっと小銃を構え、ハナに狙いをつけた。
宋紀は咄嗟(とっさ)に空に向けて銃を発射した。背後の銃声にコサック兵たちが振り向いた。宋紀は踵(きびす)を返し、無我夢中で走った。
その後、ハナの消息(しょうそく)は分らない。この山塞にいるのではないかと一縷(いちる)の望みを抱いてやってきたのだった……。

ハナもまた、赤児を殺してしまった過去があったのか……。
彼女を突き動かしているものが何なのか、少しだけわかったような気がした。
自分と同じものだったんだ。
そう、感慨に耽(ふけ)っていると、
「ねえ、菊池さん」
ソヒョンが私に向かって言った。
「あたし、わかる。ハナさん、絶対に生きてる」
宋紀は、これから斉斉哈爾(チチハル)に向かい、ハナを探すという。私とソヒョンは、宋紀と再会を約して別れた。
三日の旅を経て瑷琿(あいぐん)に戻ると、鉄のレールや枕木など、鉄道資材が夥(おびただ)しく運び込まれていた。

鉄道を敷くのだろうか。司令部に軍馬を返しに行ったついでに、知り合いの将校に聞いてみると、果たして、そのとおりだった。

「逃げた支那人に紛(まぎ)れて、相当数の義和団の連中が南の斉々哈爾(チチハル)を目指しているようだ。兵站(へいたん)鉄道を敷いて、大部隊を早く送り込めるようにするわけさ」

義和団を追うというのは口実で、グリーブスキー中将は、この機会に乗じて、満州の南に深く侵入し、ロシア帝国の版図を拡大して大手柄をたてようという野心を抱いているのだろう。避難民に同行している義和団員を追撃するだけなら、鉄道のレールを敷いている暇(ひま)に馬で追ったほうが早いに決まっている。

私は、一度ウラジオストックに戻る事にした。旅費が残り少なくなっていたし、ロシア軍の満州進出の模様を、伊東大尉に報告しなければならない。ハナは、最終的には斉斉哈爾(チチハル)を目指すはずだが、ここから陸路で追いかけるよりも、ウラジオストックから東清鉄道の汽車に乗り、迂回して斉斉哈爾に向かうほうが早いのではないか、と思いついたのだ。

ソヒョンにその考えを伝えると、彼女は同意し、

「早く斉斉哈爾(チチハル)、行きたい」

とせがんだ。私たちはアムール川を渡ってブラゴベシチェンスクに至り、ウラジオストックまでの汽船の切符を手配しようと船着き場に赴いたが、戦禍に巻き込まれるのを避けようと逃げ出す者だけでなく、一攫千金(いっかくせんきん)を狙って商売目当てにやって来る者も多く、手に入らない。在留日本人会事務所の藤井青年に頼んで手を廻してもらい、やっと切符が手に入ったが、出発は三日後になるという。

その間、ロシア軍が満州に向けて敷設している兵站(へいたん)鉄道を見学し、報告書にまとめようと思い立ち、ロシア軍に申し出た。幸い許可が下りたので、私はソヒョンを連れて再び瑷琿に渡った。

郊外に簡易停車場が設けられ、単線のレールが敷かれていた。小さな機関車も運び込まれ、大きめのトロッコが連結されている。そのトロッコに、十名の技術者や、警備のロシア兵とともに乗り込んだ。

「すごい、菊池さん！」

トロッコの縁(へり)につかまりながら、ソヒョンが叫んだ。

「早い、早い。馬より早い！」

意外にも彼女は、汽車に乗るのは初めてとのことだった。

一時間近くも走ると、テントが並び、枕木がうずたかく積まれているのが見えた。その地点までレールが敷かれているのだ。

だが、様子がおかしかった。敷設工事が行われているはずなのに、人影が見あたらず、騒音どころか、話し声も聞こえない。コサック兵たちは、銃を構えてトロッコを降りた。私たちも後に続いた。

ふと、積まれた枕木の背後で、何かが蠢(うごめ)いているのが見えた。近づいてみると、ロシア人技術者や支那人作業員が後ろ手に縛られ、猿ぐつわをはめられて転がっていた。やや

離れて十人ほどのコサック兵の屍が散らばっている。
襲撃されたんだ……。
私はソヒョンを見た。ソヒョンが叫んだ。
「ハナさんだ！」
次の瞬間。銃声が響いた。一人のコサック兵が頭を撃ち抜かれ、地面に倒れ伏した。
技術者たちは腰を抜かし、コサック兵たちは散開して物陰に隠れた。私はソヒョンの手を引き、トロッコの背後に駆け込んだ。
またも銃声が響いた。もう一人、コサック兵が倒れた。
トロッコの陰からそっと覗くと、工事現場から二百メートルほど離れたところに、小さな林の茂みがあり、その側に、鉄道のレールや機材を積んだ荷車が置いてあった。
荷車の背後に、人影が見えた。狙撃手がそこに潜んでいるのだろう。
「Огонь（撃て）！」
コサック隊長が叫び、兵たちが射撃をはじめた。その時、荷車の背後から、小銃を構えた馬賊が現れた。
ハナだった。
彼女は、手に擲弾（手榴弾）を持っていた。大きく振りかぶって、ハナは擲弾を投げた。コサック兵より十メートルほど手前で破裂した。犠牲者はいなかったが、コサック兵たちを怯ませるには十分だった。
「走你（行くぞ）！」
ハナが叫んだ。茂みから馬賊たちが、馬を曳いて飛び出した。そのうちの一頭に、ハナは飛び乗った。その背後で馬賊たちは、手早く荷車に馬をくくりつけると、自らも馬に飛び乗った。
ハナが背後を振り向いた。私と目があったような気がした。ハナの唇の端が軽くゆがんだ。そして馬の尻に一鞭当てた。ハナを乗せた馬が駆け出し、馬賊と、鉄道資材を積んだ馬車が後に続いた。
「生きてた」
傍らで、ソヒョンが涙を流していた。
「やぱり、ハナさん、生きてた」

（つづく）